UNIVERSITY OF YAMANASHI HOSPITAL
はなみずき
（病院だより）
第73号
2017年5月
発　行
山梨大学
医学部附属病院

病院長就任のご挨拶

病院長　武田　正之

2017年4月1日より病院長に就任いたしました武田正之です。専門は「泌尿器科」で、ロボット支援内視鏡下手術、前立腺癌、排尿障害、腎移植などを担当しています。2009年から2013年まで医療安全担当副病院長、2013年から4年間医学部長を兼務し、このたび附属病院長を担当することになりました。島田眞路学長（元病院長）、藤井秀樹前病院長（現 市立甲府病院長）が築き上げて来られた高度医療と医療安全体制を堅持し、さらに向上させて行く所存ですので、どうぞよろしくお願いいたします。

本院は、1983年に山梨医科大学附属病院として創設された山梨県唯一の特定機能病院です。2002年4月1日に旧山梨大学と旧山梨医科大学を統合して新「山梨大学」が設立されたため、山梨大学医学部附属病院と名称が変更されました。2004年4月1日の国立大学法人化後は、国立大学法人山梨大学医学部附属病院となり、現在に至っております。また、本院は「地域がん診療連携拠点病院」、「肝疾患診療連携拠点病院」などの指定を受けており、各科の壁を越えた集約的治療体制を整えております。

附属病院の再整備状況では、2015年に第Ⅰ期工事が終了して2016年1月から新病棟（南北）が稼働しており、現在は第Ⅱ期の基幹・環境整備工事を実施中です。現在稼働中の新病棟内の手術部には、手術台と心・血管X線撮影装置を組み合わせた本格的ハイブリッド手術室が設置されています。ここでは、大動脈瘤ステントグラフト治療や、これまで手術に耐えられないと判断された高齢の方などにも可能な大動脈弁狭窄症の新しい治療方法である「経カテーテル大動脈弁留置術」（TAVI）の実施が可能です。さらに、我が国で最高の性能を誇る3テスラの高磁場MRI装置を搭載した手術室、手術支援ロボット「ダビンチSi」専用手術室も設置されています。新病棟開院前の2013年6月に山梨県内で最初に開始したロボット支援腹腔鏡下前立腺癌手術はすでに150例以上に達し、自己血も含めてほとんど輸血を実施していません。2016年9月からは腎癌に対するロボット支援腹腔鏡下腎部分切除術を開始し、20例に達しています。従来の腹腔鏡下手術では困難であった難易度の高い症例に対しても腎温存手術が可能であり、腎機能に最も影響する腎阻血時間は有意に短縮しています。今後は、消化器外科、婦人科領域などでもロボット支援手術件数を増やして行く予定です。放射線治療設備など他にも多くの最新鋭の医療設備を備えており、安心・安全で高度な質の高い医療の提供を心がけております。放射線医療関係では、山梨先端分子画像検査センター整備事業として医学部敷地内の南東端に医療法人篠原会による「山梨PET画像診断クリニック」を開設し、2017年5月1日から開院しています。最新鋭のPET/CT　2台、乳がん専用のマンモPET　1台、3テスラMRI　1台、サイクロトロン1台を装備しており、附属病院の診療・研究にとって大きな力となると確信しています。（関連記事が最終ページにあります。）さらに2020年には附属病院の新々病棟（病床250床）を開院して、高度医療をより一層推進させる予定です。

新病院長の喫緊の課題は、①年度内に予想される「特定共同指導」対策、②附属病院の再整備第Ⅱ期工事の実施、③病院経営改善、④先進医療を含む高度医療と臨床研究の推進、であります。職員の皆様のご支援をよろしくお願い申し上げます。

退任あいさつ

前病院長、前理事、前副学長、前保健管理センター長　**藤井　秀樹**

去る3月31日を以て病院長の職を終えました。大きな事故もなく、それなりの成果を出せたのではないかと思います。これもひとえに職員の皆様のご努力のおかげと退職してはおりますが改めて心より感謝申し上げます。2年前、病院長のご指名をいただきました際には、病院長は大学全体の管理にも関わる理事になることになっておりましたので、教授を退任し保健管理センター長も併任しておりました。病院長としてすべての精力を病院のみに注げなかったことを反省しますとともに皆様にお詫び申し上げます。代わって7名の副病院長が全力でそれぞれの領域をしっかり発展させてくださいました。改めてお礼申し上げます。この7名の副病院長には担当領域に多少の変更はありますが、武田病院長のもとさらなる病院の発展にご尽力いただきたいと思います。よろしくお願い申し上げます。

この2年間で印象深いのはやはり大村智先生のノーベル賞受賞であります。この受賞を機に、私自身、理事･副学長という立場から頻回に大村先生とご一緒する機会を持つことがありました。大村先生はご存じのように大村美術館をお創りになられたように美術へのご造詣は大変深くていらっしゃいます。その先生が富士吉田在住の櫻井孝美画伯の「富嶽･輝」という300号の大きな作品を病院に寄贈してくださいましたので、病院玄関ホールに展示させていただきました。また、大村先生推奨の元女子美術大学学長で「青の画家」と呼称されている佐野ぬい画伯からも「午後の青い視点」という作品を寄贈していただき、新棟1階の通路に展示いたしました。いずれの作品も力が湧いてくる作品で「art therapy」という言葉がふさわしいと今も思っています。もう一つ印象に残るのはやはり新棟への引っ越しと稼働です。引っ越しに関しては患者さんに被害が生じるようなことがないか心配で、恥ずかしいことですが実は2日ぐらい前から全く眠れませんでした。しかし、シミュレーションも含めた病院職員の皆さんのご努力で私の心配は杞憂に終わってしまい、その後の稼働も極めて順調に経過しました。改めて本院の職員の結束の強さを感じますと同時に、もう本院にはおりませんが皆様に感謝申し上げます。

病院長を離任すると同時に山梨大学を退職いたしました。33年前、山梨医科大学附属病院が開院すると同時に第一外科に入局し、大学からは一度も他施設に行かず、まさに附属病院とともに歩んだ33年間でした。これからも附属病院を見守り、微力ではありますが附属病院の発展に貢献したいと思っております。2年間、そして33年間ほんとうにありがとうございました。

藤井病院長離任式

去る3月31日、藤井病院長と退職される10名（欠席者3名）の離任式が挙行されました。

始めに、小林総務課長から離任される方の紹介と、長年の功労に対し感謝の言葉が述べられました。続いて、多くの職員を前に藤井病院長から、在任2年間を振り返って、離任の挨拶がありました。その後、退職者お一人お一人からも挨拶をいただきました。式の最後には、在職職員から花束が贈呈され、盛大な拍手のなか、大勢の出席者に見送られながら病院を後にしました。

前列左から、石川看護師長、小林看護師長、藤井病院長、山﨑看護学科教授、武田医学域長、後列左から、田中事務職員、熊谷技術職員、長田看護師長、米山技術職員

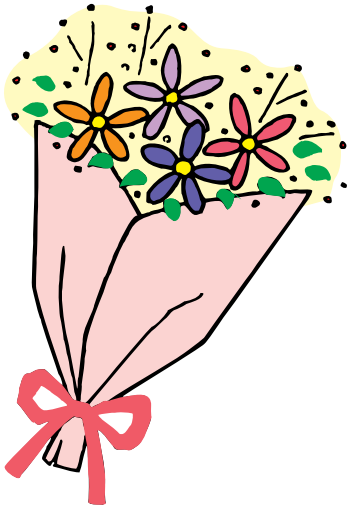
退職にあたって

前精神科長　本橋　伸高

この度、本院での12年半の勤務を経て退職いたしました。長い間どうもありがとうございました。あっという間の出来事でしたが、印象に残ったことが幾つかあります。

まずは卒後臨床研修制度が大きく変わり、大学病院から市中病院で研修を受ける方々が激増しました。どこの科でも入局者の減少に苦労をされているのではないでしょうか。当科においてもその影響が少なからずあり、スタッフ確保のために関連病院の常勤医を医局に戻し、小生がその補いのために非常勤医として毎週東部の病院に通ったことが懐かしく思い出されます。そのとき眼前に現れた壮大な富士山の姿は大きな慰みとなりました。このほか、病院機能評価の準備についても忘れることはできません。精神科は独自の評価を受けるために、マニュアル作りなどに奔走しました。審査当日はもちろん緊張しましたが、精神保健福祉士や臨床心理士がいないことについての指摘を受けることで、その後のスタッフ採用を後押ししていただけたものと思っています。さらには、新病棟の手術室が拡張されたことにより、当科の電気けいれん療法を手術室でより安全に行うことができるようになったことも印象に残っています。

総合病院での精神科のあり方は難しい点が多々あります。精神的な問題を抱える方の数は非常に多いので、当科が協力できる部分は少なくないと思いますので、今後とも皆様のご協力をお願いしたいと思います。



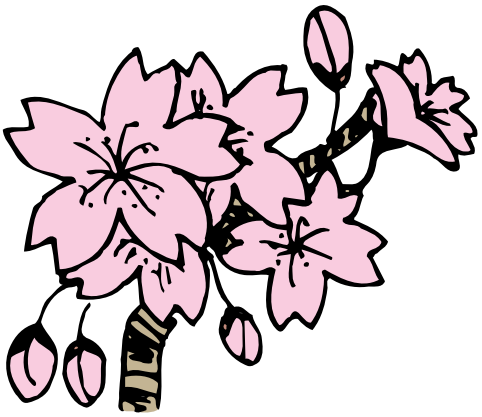
退任あいさつ

手術部 前看護師長　小林　ひとみ

昭和58年の４月に国立国際医療センターより赴任し、数え切れないくらい長く勤務してきました。いろいろな部署で、大勢の方に支援していただき感謝しています。

手術部には一番長く勤務しました。看護師が手術の準備から後片付け、夜間は清掃まで行っているのに驚き、事務部門や医師の応援をいただきながら要望書を作成し、17名の外部委託者を採用することができました。看護師が手術に専念できる環境を作ることができた時は、本当に嬉しかったことを記憶しています。新棟に移転してからも新しい検査や手術に対応できるようにと他病院の見学や、学習会･シミュレーションなど、忙しい一年でした。一つ一つが初めてなのに、共に創る充実感があり、楽しい毎日でした。

開院からなので、病院に育てられ今日があると思っています。思い出多いこの病院が大好きですし、これからも陰ながら見つめていきたいと感じています。長い間のご支援ありがとうございました。



お世話になりました

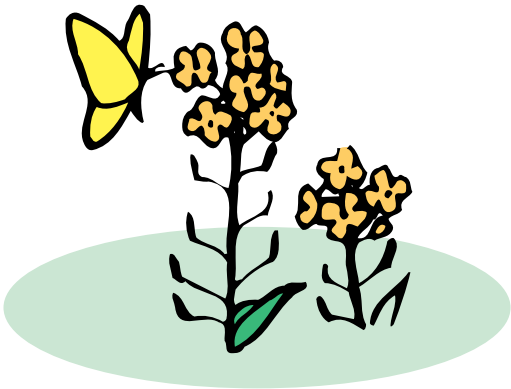
4西病棟 前看護師長　長田　玉枝

私は本年3月31日をもち、山梨大学医学部附属病院看護部の看護師長を退任いたします。30年の長きにわたり本院で看護師生活を送ることができました。改めて公私にわたりお世話になりました皆様に心から感謝いたします。

本院に赴任したばかりの頃は、四方が畑と田んぼの中に7階建ての病院があるだけの景色でした。その後環境も目覚ましく変わり現在の町の変化は想像もできませんでした。

本院では、内科病棟からスタートし外科、精神科、看護部といろいろな部署で様々なことを学び、大病も験せずに看護師生活を全うすることができました。患者さん、同僚、家族に支えられ、毎日楽しいことや悲しいこと辛いことを経験しながら、今日の日が迎えられたと思います。山梨大学病院での生活は非常に多忙でしたが学ぶことは多く今となっては楽しい思い出です。

最後にご指導いただいた皆様やスタッフ、無理を言っても聞いていただいた事務の方々に深く感謝を申し上げます。今後のご発展をと皆様のご健勝を祈念申し上げます。ありがとうございました。



就任あいさつ

皮膚科長　川村　龍吉

平成29年１月１日付けで本院皮膚科長を拝命いたしました。私は平成２年に山梨医科大学を卒業後に同皮膚科に入局し、故玉置邦彦第二代教授ならびに島田眞路第三代教授（現本学学長）より御指導いただき、これまで主に皮膚のアレルギーや感染症などに関する研究に携わってまいりました。診療では皮膚腫瘍と皮膚感染症を専門とし、他にアレルギー性皮膚疾患や自己免疫性疾患などにも取り組んでまいりました。他病院への出向や留学期間を除くと、本院での勤務期間は今年で丁度20年目になりますが、これまで他科の先生方や各診療部の職員の皆様方には、長きに渡り大変お世話になってまいりました。この場をお借りして改めまして心より御礼申しあげます。

さて、この時期になると県内の新聞やテレビ局から紫外線による皮膚癌に関する取材をよく受けます。山梨県の日本一といえばフルーツ収穫量と日照時間ですので、燦々と降り注ぐ太陽光の恩恵で山梨のももやぶどうは本当においしいですが、一方で他県よりも紫外線による皮膚癌が発症しやすいことは想像に難くありません。もし顔や手などの露出部に疑わしい病変を見つけられましたら、是非とも当科にご紹介いただければ幸いに存じます。また、他の皮膚疾患につきましても先進の医療技術を積極的に取り入れて、教室員一丸となって地域医療に貢献していければと思っておりますので、今後とも何卒よろしくお願いいたします。

就任にあたって

消化器外科、乳腺・内分泌外科長　市川　大輔

この度、３月１日付で藤井秀樹教授の後任として消化器外科、乳腺・内分泌外科長を拝命いたしました市川大輔と申します。私は、奈良県出身で、京都府立医科大学を卒業し、以降、米国留学の期間を除いて京都府内の病院に勤務してまいりました。京都第一赤十字病院に在職中は、消化器全般の外科診療に従事し、主に上部消化管ならびに膵臓外科を担当しておりました。前任地の大学病院では主に上部消化管の外科診療を担当し、大学院生の臨床研究や内視鏡外科の教育などにも積極的に関わってまいりました。

さて近年、腹腔鏡手術が一般化し、新たな技術としてロボットを用いた手術が出現するなど、外科治療が劇的に変化しております。また、高度進行癌に対する外科治療の限界から集学的治療の必要性が高まり、一方で、次年度から新たな専門医制度が開始されるなど、我々外科医を取り巻く環境も目まぐるしく変化しております。このような変化の中で、教室単位の対応には限界があり、その意味でも学内の他教室の先生方や、他の医療従事者の皆様のご協力をお願いし、患者本位の医療ならびに若手外科医の育成を行っていきたいと考えております。今後は、診療のみならず教育や研究にも積極的に関わることで、山梨県全体の医療に貢献できるよう努力してまいる所存でございます。学内の皆様方には、ご指導ご鞭撻を賜りますようお願いいたしまして就任の挨拶とさせていただきます。

病院再整備の進捗状況について

病院経営企画課 再整備企画グループ係長　大内　寿子

院内関係各位におかれましては、平素より病院再整備事業に多大なるご理解ご協力を賜り厚く御礼申し上げます。

昨年９月に立ち上げた新棟（Ⅱ期棟・Ⅲ期棟）設計検討 WG において、Ⅱ期棟の診療科配置を審議しました。Ⅰ期棟・部門との動線、診療科の特性、診療科同士の連携、看護必要度等を考慮し、右記表のとおり配置することといたしました。

現在、設計業者、施設管理課ならびに病院経営企画課の関係者により、各部門・病棟階ごとの新棟設計検討 WG メンバーの方々からヒアリングを実施しています。診療科特有の処置室などはヒアリングでのご意見を参考にし、各階共通設備のスタッフステーション・トイレなどはⅠ期棟設計の経験を踏まえて、設計業務を行っております。限られた面積、厳しい財源の中でより良い病棟の完成を目指し、日々邁進しております。

病院再整備事業は平成30年度からⅡ期棟建築、平成32年度からⅢ期棟建築、並行して中央診療棟・外来棟の改修工事を行っていく予定です。工事による騒音等ご迷惑をおかけしますが、引き続きご協力のほどよろしくお願い申し上げます。

Ⅱ期棟診療科・部門配置

新西病棟		病床数	
7 階	血液内科	19	37
	第一内科	10	
	緩和ケア病床	6	
	共通	2	
6 階	耳鼻科	30	50
	皮膚科	15	
	形成外科	5	
5 階	第三内科	34	49
	神経内科	9	
	歯科	6	
4 階	小児科	28	30
	第二外科	2	
	院内学級		
3 階	精神科	40	40
2 階	婦人科	32	44
	放射線科	8	
	第二内科	2	
	ＲＩ	2	
1 階	入退院センター		
	物流センター		
	洗濯室		
	ベッド洗浄室		
	病理解剖室		
計		250	

病院各部門代表者

病院長・副病院長

病院長	副病院長						
	財務管理・経営改善・地域医療担当	安全管理担当	労務管理・臨床研究担当	臨床研修・防災担当	病院再整備・病床管理・運営改善担当	看護・患者サービス担当	総務担当
武田　正之	佐藤　　弥	榎本　信幸	平田　修司	松田　兼一	木内　博之	佐藤　あけみ	山田　　徹

中央診療部門等

部門名	部長等	副部長等
検査部	井上　克枝	金子　　誠 雨宮　憲彦
手術部	石山　忠彦	
放射線部	大西　　洋	本杉 宇太郎 坂本　　肇
材料部	松川　　隆	
輸血細胞治療部	井上　克枝	金子　　誠
救急部	松田　兼一	
集中治療部	松田　兼一	森口　武史
新生児集中治療部	杉田　完爾	
病理部	加藤　良平	中澤　匡男 石井　喜雄
分娩部	平田　修司	笠井　　剛
リハビリテーション部	波呂　浩孝	小尾　伸二
血液浄化療法部	深澤　瑞也	
光学医療診療部	佐藤　　公	山口　達也
総合診療部	佐藤　　弥	針井　則一
臨床研究連携推進部	岩崎　　甫	小河　祥子 手塚　春樹
ME センター	中島　博之	
医療チームセンター	飯嶋　哲也	
生殖医療センター	笠井　　剛	
腫瘍センター	桐戸　敬太	三森　　徹
肝疾患センター	坂本　　穣	井上　泰輔
口腔インプラント治療センター	上木 耕一郎	
遺伝子疾患診療センター	中根　貴弥	
循環器救急センター	久木山 清貴	尾畑　純栄
リウマチ膠原病センター	波呂　浩孝	
アレルギーセンター	増山　敬祐	
病院経営管理部	佐藤　　弥	
栄養管理部	小林　貴子	
医療の質・安全管理部	榎本　信幸	鈴木　章司
感染制御部	波呂　浩孝	井上　　修
薬剤部	鈴木　正彦	河田　圭司 手塚　春樹
医療福祉支援センター	端　　晶彦	
臨床教育部	松田　兼一	
臨床教育センター	板倉　　淳	本杉 宇太郎
専門医育成支援センター	佐藤　　弥	川口　章夫

看護部

看護部長	副看護部長			
	業務担当	質保証担当	総務担当	教育担当
佐藤　あけみ	杉田　節子	望月　恵美	萩原 千代子	井上　貴美

部門名	看護師長	副看護師長
安全対策担当（GRM）	村松　陽子	伊藤　雅美、北井　朋美
感染管理担当（ICN）	矢崎　正浩	窪川　佳世
医療福祉担当	穴水　美和	松土　裕子、茂手木 智美
緩和ケア担当		中嶋　君枝
褥瘡担当		金丸　明美
管理師長（夜勤師長）	蓮沼 知津子	
医療情報・診療報酬担当	齊藤　幸美	
教育担当	永田　明子	中込　美幸
研究・実習担当	小澤　和子	
病院再整備・病床管理担当	小野 さつき	
外来	三平 まゆみ	大芝 まゆみ、山中　浩代、杉本　美貴
手術部	杉田　俊江	櫻本かおり、土屋一枝、名取貴史、溝口真由美
材料部	渡邉 理映子	
ICU 病棟	岡村 真由美	牛山 佳菜、山本 智子、谷戸 るみ、坂本 友紀
NICU 病棟	平野 みのり	寺島 由美子、清水　陽子
GCU 病棟	島田　昌子	田邉　玲子、齋藤　　渚
1 階西病棟	金丸　紀子	筒井 ひとみ、青木　真理、稲葉 さやか
2 階西病棟	大門　恵美	高橋　里香、山口　典子、金丸　　綾
3 階西病棟	茶谷　直子	小池　美和、田草 裕美子、大久保 香織
4 階西病棟	山本 ゆかり	原　　克枝、赤池　陽子、細野　英伸
6 階西病棟	山口　奈巳	青柳 しづか、松田　旬美、秋山　友梨
7 階西病棟	牧野　基美	内田　純子、藤原 由理香、望月 あゆみ
4 階南病棟	河手　久美	伊藤　由香、名取 佐知子
5 階南病棟	岩澤　久美	中柄　創和、清水　美紀、小倉　幸子
6 階南病棟	河西　典子	高尾　葉子、相川　真弓、青木 絵梨子
7 階南病棟	古屋　塩美	金子　春美、神田　　藍、山本　瑠美
4 階北病棟	小泉 夫美子	竹田　礼子、長澤　良美
5 階北病棟	杉山　千里	辻　　稔、鈴木　聖美、伊藤　祥子
6 階北病棟	伏見 ます美	武田　陽子、三枝　栄江、吉澤　紀美
7 階北病棟	山本　秀美	古川　明美、板野　雅子、手塚 絵里子

事務部

事務部長
山田　　徹

課名	課長	補佐・専門員	課・室名	課・室長	補佐・専門員
総務課	小林　　充	齋藤　　敦、土屋　　豊、田中　純子	医事課	望月　眞樹	佐藤 康樹、有野 佳江、東条 加代子
管理課	高山　俊雄	浅川　辰仁、小林　義仁、大和　正基	病院経営企画課	野中　昭彦	窪田　広仁、萩原　正直
学務課	梶原　　光	島崎　　靖、乙黒　　健	医療情報室	塩島　正弘	山本　洋一

医療福祉支援センターの業務拡大について

医療福祉支援センター 看護師長　穴水　美和

平素より、医療福祉支援センターの活動に対し、格別のご協力に感謝いたしております。

医療福祉支援センターでは退院支援･転院支援、患者相談、地域連携の役割を担っております。退院支援･転院支援においては9,300人(H27年度)、H28年度はH27年度以上の患者さんと関わらせていただき、医師･看護師･リハビリスタッフ等多職種と連携を取り、退院後の療養先で安心して生活を継続できるように日々関わらせていただいています。また、相談業務もがん相談、経済問題に関する相談、在宅での療養についての相談など、内容も多岐にわたっております。

さらに今回、①特定機能病院の役割に専念するための外来患者数増加への対策及び長い待ち時間による患者の苦痛を軽減させること、②逆紹介率を向上させることを目的とし、地域連携部門を立ち上げることとなりました。

今後は、専用の相談窓口を設置し、医師の説明後、患者さんの要望に沿った「かかりつけ医」の相談と紹介をしていく業務を計画しています。県内の病院･クリニックにも出向き、連携のお願いをしていく予定であります。また、病病連携･病診連携を深めるため、地域との交流会なども計画していきたいと考えております。上質で適切な医療の提供ができるよう、みなさまにもご協力いただくことが多々あると思いますが、よろしくお願いいたします。

退院支援カンファレンスの様子

効率的な病床運用について

看護部 病床管理担当師長　小野　さつき

平成28年10月より、本院で治療を必要とする患者さんの入院が、スムーズにできることを目的に、以下の事項に注意しながら、日々、業務を実践しています。

1. 緊急入院患者の受け入れに関する病床管理
2. 入院患者の院内での転棟に関する病床管理
3. ICU 入室患者の退室調整管理
4. 入院患者の個室入室･大部屋入室希望に関しての病床管理

過日、山口大学を訪問し「病床運用システム」の活用状況について説明を受け、毎朝実施している「ベッドコントロールミーティング」に参加させていただきました。

山口大学では、「24時間以内に入院が決定していない空床は全て共通病床」を徹底して実践しています。そのため、診療科病床以外の病棟への入院･転棟を依頼する患者さんの基準が定められており、専門性と看護の質を保証し、病棟間の公平性を担保できるよう、看護師長による「ベッドコントロールミーティング」を実施していました。また、入退院に関する取り決めとして、遅くとも２日前には入退院の日程を明確にする（DPC の入院期間を考慮･クリニカルパス使用）など、病院全体で共通認識を持ち、病床運用に取り組んでいることを学ばせていただきました。

今後はこの経験を生かし、本院においても、診療科の医師･看護部･事務部門等が連携し病院全体で病床運用に取り組んでいけるよう活動していきたいと思いますので、皆様のご協力のほど、よろしくお願いいたします。

山梨ＰＥＴ画像診断クリニックが開所します

管理課長　高山　俊雄

本年5月1日から山梨大学医学部敷地内に医療法人社団篠原会の運営する山梨ＰＥＴ画像診断クリニックが開所しました。これは、平成27年3月に「山梨先端分子画像検査センター整備運営事業」として公募により、ＰＥＴ等画像診断を行う設備を整備運営する独立した医療機関を本学敷地内に誘致したものです。

山梨ＰＥＴ画像診断クリニックは、高度で専門的ながん診療の一助となるＰＥＴ-ＣＴ装置、県内初のマンモＰＥＴ装置を具備し、当院に不足するがん診療、画像診断機能を補填してくれるものです。また、施設内には診療だけでなく研究にも活用できるサイクロトロン、研究用のラボ、ホットセルスペースも設置されています。

山梨大学は、当クリニックとの連携を強化して、地域における診断及び治療の質的向上、最先端医療の研究･開発拠点、臨床教育でも活用できる施設として当クリニックが将来にわたり必要不可欠な施設となることを期待しています。

中堅職員からのメッセージ

本院のリハビリテーション部

リハビリテーション部　遠藤　浩

リハビリテーション（rehabilitation）とはre（再び）＋ habilis（適した）+ation（～になること）、すなわち「再び適した状態になること」で「本来あるべき状態への回復」などの意味を持ちます。日本での、リハビリテーションは病気や外傷が原因で心･身の機能と構造の障害と生活上の支障が生じたときに、個人とその人が生活する環境を対象に、多数専門職種が連携して問題の解決を支援する総合的アプローチの総体といわれています。

本院リハビリテーション部も私たち理学療法士（physical therapist 略称:PT）７名の他に、作業療法士（occupational therapist 略称:OT）４名、言語聴覚士（speech therapist 略称:ST）２名と医師２名の異なる職種で構成され、各診療科医師、看護師、技師装具士、メディカルソーシャルワーカー、ケアマネージャーなど様々な職種の皆様やご家族とも連携しながら、患者さんの ADL、QOL の改善を目指しアプローチをしています。また褥瘡対策チームや糖尿病教室、さらに排尿ケアチームにも協力しながら、総合的にケアできるよう日々活動しています。しかしながら、私個人としては、まだまだ知識、技術が至らないことが多くご迷惑をお掛けしていますが、皆様と協力し患者さんの ADL、QOL を一日でも早く改善させられたらと思っています。今後ともよろしくお願いいたします。

RICE INK　VEGETABLE OIL INK　VOC FREE
この印刷物は環境にやさしいVOC（揮発性有機化合物）成分フリーの植物油型インキを使用して印刷しました。